

J. ポール・ゲティー美術館の
傑作

古代美術



J. ポール・ゲティー美術館の

傑作

古代美術



J. ポール・ゲティー美術館の 傑作

古代美術

ロサンゼルス

J. ポール・ゲティー美術館

口 絵：

ニケの小像に支えられたティミアテ
リオン [部分]

南イタリア（タレントムもしくはシ
チリア）

テラコッタ、紀元前500～480年頃

86.AD.681 （79ページ参照）

J. ポール・ゲティー美術館

発行者：クリストファー・ハドソン

編集長：マーク・グリーンバーグ

編 集：ベネディクテ・ギルマン

コーディネーター：スーザン・ワトソン・ペトラッリ

写 真：エレン・ローゼンベリー

テキスト執筆：エレナ・タウン＝マーカス

デザイン及び制作はチームズ・アンド・ハドソン社が担当し、J. ポール・ゲティー
美術館と共同出版した。

翻 訳：マケニー田島千栄 (Christiane Di Mattéo Translations)

© 1997 The J. Paul Getty Museum

1200 Getty Center Drive

Suite 1000

Los Angeles, California 90049-1687

ISBN 0-89236-426-2

Color reproductions by CLG Fotolito, Verona, Italy

Printed and bound in Singapore by C.S. Graphics

目 次

館長あいさつ	6
青銅器時代と幾何学様式時代	9
アルカイック時代とクラシック時代	23
ヘレニズム時代	59
エトルリアと古代ローマ前の南イタリア	73
共和政ローマ時代と帝政ローマ時代	95

館長あいさつ

J・ポール・ゲティーは1930年代始めから美術品の収集を始めたが、古代ギリシャやローマ時代の芸術品の購入を手掛けたのは、1939年になってからのことだった。その後の古代美術への傾倒ぶりは美術収集の歴史上でも稀なほどで、古代遺跡の豊富な地中海地方の国々に足を運んだり専門的な文献から知識を得たほか、イタリアでヴィラを数軒購入するまでの熱の入れようだった。1955年には古代都市ネアポリス（現ナポリ）にほど近いヘラクラネウムにあったヴィラ・デイ・パビリを舞台に、「コリントからの旅」という短編小説を著わし、その館の主ルシアス・カルパニウス・ピゾを裕福な文化人とした人物描写には、ゲティー自身の姿が重なっているようだ。（後年ゲティーがピゾの館の復元を決心したのも自然な成り行きと言えよう）。1954年にマリブの自宅に小さな美術館を開設し、三年後にはそこに私蔵の古代美術品をそっくり移し、この美術館はその存在が認められるようになった。その後もゲティーは1976年に死没するまで古代美術品を求め続けた。ランズダウンハウスから入手したヘラクレス像や、優れたローマ時代の肖像群などゲティーによる初期の購入品の数々は、今もゲティー美術館のコレクションの主幹を成している。

J・ポール・ゲティーは1976年に没し当美術館に7億ドル相当の遺産を遺した。これをもとにコレクションの拡充はむろん、ゲティー財団の設立により、美術の研究、保存、教育を並行して推進する機構を通して様々なことが実現されてきた。

古代ギリシャやローマの美術は、マリブにピゾの館を復元するようゲティーを触発したいきさつだけでなく、広く西洋美術の起源となった思想や形状を代表するものとしてもゲティー美術館における礎であり続けている。従来からの私蔵品とその後1960～70年代に加えられた所蔵品に一貫した、古代ギリシャやローマに代表される西洋の遺産に的をしばり石や青銅の彫刻を主にした収集方針を受け継いで、ゲティー美術館のコレクションは過去15年の間に量、内容ともにめざましい発展を遂げた。彫刻やガラス工芸品を好み、壺は好まず石棺など死に関するものは特に嫌ったゲティーの意向を受け、大小の大理石、青銅、テラコッタの彫刻像を数多く購入した。また、キクラデス、キプロス、アナトリアなど地中海地方に出土した青銅器時代の彫刻の入手により、当コレクションは年代的に千年逆のぼった。ギリシャや古代イタリアの壺は、元来わずかな寄贈品に限

られていたが、モリー・アンド・ウォルター・バラス・コレクションの併合により大幅に拡充された。初代古代美術部長ユリ・フレルの指揮下、個人的なコレクションからより統合的なものへと大きく様変わりし、展示室を訪れる人々を魅了する一方、収納室にも多く収められ専門家の関心を集めている。

1986年にマリオン・トゥルーが学芸部長に任命されて以来、一層コレクションの充実が図られてきた。数々の彫刻や壺のほか、古代ギリシャやローマの金銀、ガラス、貴石製の贅沢な宝飾品が加わった。同時に収集の範囲もさらに広げられ、当コレクションの核であるギリシャ・ローマ美術との関連のうちに、ヨーロッパ北部、エジプト、近東からの美術品も加えられた。古代美術部門ではこうしたコレクションの拡充に伴い、学術シンポジウム、出版、展示においてめざましい活動を展開してきた。また、より多くの人に美術品に接してもらうため、一般観賞者を対象にした講演や公演、家族向けのプログラムを提供している。

これを執筆中にも、ゲティーによる私蔵品の提供以来最大規模の併合が成り、三百余点からなるローレンス・アンド・バーバラ・フライシュマン・コレクションが、主に寄贈の形で当美術館のコレクションに収められた。これにより当美術館のギリシャ、ローマ、エトルリア美術部門は画期的に重要性を増した。このコレクションは当傑作集の編集には間に合わなかったが、『A Passion for Antiquities: Ancient Art from the Collection of Barbara and Lawrence Fleischman』（1994年当美術館出版）にほぼ全容が収録されている。

このテキストの執筆者エレナ・タウン＝マーカスに感謝を捧げる。

この傑作集が出回る頃、マリブの館は1974年の開館以来初めて門を閉ざしていることであろう。そして間もなく、ボストンのマチャード・アンド・シルヴェッティ社の設計に基づいて改築が始められることになっている。2001年に再びその門を開ける時は、単にゲティー美術館の古代美術部門としてでなく、比較考古学の中心、即ちゲティー財団の各部門が学術的な発展、保存技術者の養成、子供向けおよび広く一般観賞者向けの教育を総合的に推進する場として生まれ変わる。ゲティー美術館は歴史こそまだ五十年にも満たないが、その中核である古代美術部門の傑作をここに集めて紹介する。

館 長

ジョン・ウォルシュ



青銅器時代と幾何学様式時代

ギリシアの青銅器時代は、通例紀元前3000年から同1100年の間を指す。「英雄達の時代」としても知られるように、後期青銅器時代は叙情詩人ホメロスのイリアスやオディッセイアの舞台となった時代である。この時代ギリシアでは、キクラデス文明、ミノス文明（注：クレタ文明とも呼ばれる）、ミュケナイ文明といった多様な文明が開花した。

青銅器時代は、エーゲ海のキクラデス諸島での経済と文化の発展に始まった。キクラデスは、ギリシア神話の神々アポロとアルテミス（ディアナ）の生誕地とされる聖地デロス島を囲む群島で、東部地中海地方に展開した交易の要所として栄えた。

ナクソス島やパロス島などキクラデスの島々で豊富に産出する大理石を使って、男女の小像が作られた。墓地で発見され副葬品らしき小像もあれば、神聖な場所であったと見られる所から発掘された例もあり、これら小像の持つ意味は未だ解明されていない。女性小像は胸元で腕を交差したものが典型で、守護神や豊穡神の偶像であったものと考えられている。精巧に刻まれたこれら小像のなかには、目や毛髪、顔の入れ墨らしきものなど、彩色を残したものもある。男性小像の方が稀で、音楽家や兵士の形をしている。ギリシア全土を始め、アナトリアやキプロスでも同様な小彫刻が見つかっている。

大理石やテラコッタで作った器も、キクラデスの埋葬地から発見されている。閉まりのいい蓋付きの器など優れた造りで、内側に彩色の跡を残すものもある。

キクラデスでは紀元前1700年頃から、ミノス文明やギリシア本島の文明の影響が目立つようになった。まず、紀元前2000年から同1400年にかけて、ミノス文明が栄えていたエーゲ海のクレタ島からの影響が浸透し始めた。ミノス文明は王ミノアをその名の由来とし、行政の中心でいわゆる宮殿と呼ばれる建物群を核に集合した都市形態に特徴付けられる。城壁無しに広がるこれら建物には壁画が施され、クレタ島の風俗や風習が描かれ、それを取り巻くようにして、実在と空想の動物、植物、海生物などが描かれていた。ここは経済の中心でもあったらしく、地下は大きな農産物貯蔵庫になっていた。20世紀初頭イギリス人学者アーサー・エヴァンズ卿により、クレタ島の中心クノッソスの発掘調査が行われ、この最大級の宮殿全域から、宝飾品や小像、陶器など多数の品が発見された。クレタ島の人々は「線文字A」という文字を使っていたことがわかっているが、まだ解読されておらず、ミノス文明について多くは知られていない。

紀元前16世紀には、新たにミュケナイ人（ホメロスはアカイア人と呼んだ）による文明が発達しつつあった。その名の由来ペロポネソス半島アルゴス平野の端に築かれた都市ミュケナイには、クレタ文明の広大で開放的な大宮殿とは対照的に、高台に城壁を巡らせた要塞都市が築かれた。19世紀にドイツ人考古学者シュリーマンによる大々的な発掘調査により、ミュケナイ文明を物語る遺跡が発見された。財政管理や君主制を始め、ミュケナイ文明の詳細を明らかにする鍵となったのは、「線文字B」という初期古代ギリシア文字の解読だった。クレタ同様ミュケナイも、エジプト、キプロス、近東、西地中海地方との交易で栄えた。建物を飾る壁画にはミノス美術と顕著な類似性が見られ、クレタから伝わったことがわかるが、クレタ遺跡の壁画と異なるのは、狩猟や戦争の場面を主題としたものが主流であることで、陶画にも同様の傾向が認められる。ミュケナイ文明は紀元前1200年から1100年頃、異民族の侵入もしくは内紛により滅亡した。

青銅器時代衰退後のギリシア文明についてはほとんど知られていない。「暗黒時代」と呼ばれるこの時期には、大規模な建築物や彫像、文字などがほとんど姿を消し、深刻な文明の後退を見た一方で、鉄器使用という重要な技術進歩を遂げた時代でもあった。この時代の美術としては、形式化された小像や陶器がある。紀元前9世紀には、ギリシア美術は、陶器に描かれた幾何学模様から名付けられた幾何学様式時代に入った。青銅器時代の君主制に代わって、ポリスと呼ばれる複数の都市国家を基盤にした政治体制が敷かれた。各ポリスは自治法や独自の経済制度を確立し、軍隊も整えていた。幾何学様式時代は大型陶器に造形美術の再興を見たほか、オリンピアで競技会が創始された（推定紀元前776年）時でもある。幾何学様式時代後期には繁栄を極め、人口が増加し、地中海東部と西部の交易も盛んになった。紀元前8世紀末には、シチリア島や南イタリアに、マグナ・グラエキア（注：大ギリシアの意）として知られるギリシアの植民地が設けられ、さらに黒海地方にも植民地が広がった。このころフェニキア文字を応用したギリシア独自の筆記制度が整い、記述によるギリシア詩の最古の例はこの時代のものだ。

幾何学様式時代には陶器は日常生活用品であっただけではなく、骨壺や墓標等、葬儀用にも使われた。陶器以外にも青銅鑄物やテラコッタ製の小像が作られ、幾何学的な形状をした動物や人間の彫刻も見つかっている。青銅器時代の花や海生物の模様に代わ

って、メアンダー文（雷文）や同心円文といった幾何学模様が装飾図案の主流になった。やがて紀元前8世紀になると、形式化された人間や動物のモチーフがこれに加わった。東方から伝わった多様な技術様式やモチーフが融合され、グリフィンというライオンと鳥と蛇が合体した空想の怪物のモチーフもそのひとつだ。陶画においても、幾何学模様より人間や動物像が目立つようになった。そして紀元前8世紀の全般にわたって、しだいに人間像が再び造形表現において重要視されるようになり、ギリシア美術は初期アルカイック時代へと移行する。



豊穡女神偶像

キプロス、石灰石、紀元前3000～2500年

高さ42.4 cm、

幅27.7 cm

83.AA.38

キリア様式の女性偶像（星占家）
アナトリア、大理石、紀元前2700～2400年

高さ14.2 cm

88.AA.122





キクラデスのテラコッタ器

ペロス出土蓋付円筒型ピキシス
(小物入)
紀元前3000～2800年

高さ13.2 cm
直径14 cm
91.AE.30



ペロス出土広肩壺
紀元前3000～2800年

高さ14.8 cm
直径14.6 cm
91.AE.29

カンボス風の器
紀元前2800～2700年

高さ9.7 cm
直径12.7 cm
91.AE.28



双口カンディラ
紀元前3000～2800年

高さ10.1 cm
直径8.9 cm
91.AE.31



竪琴弾き
キクラデス、大理石、
紀元前2500年頃

高さ 35.8 cm
幅 9.5 cm
85.AA.103



後期スペドス系女性仰臥像
キクラデス、大理石
紀元前2500～2400年

高さ 59.9 cm
88.AA.80





ミュケナイの濾し器、
スフィンクス、鳥が止った雄牛、
牛の角をつかんだ男の連続図柄
キプロスもしくはギリシア（推定）、テラコッタ
紀元前1250～1225年

高さ16.6 cm
本体の直径13 cm
20番の画家作（推定）
85.AE.145

幾何学様式の馬の小像
ギリシア、青銅、紀元前800～600年

高さ7.9 cm
85.AB.445



後期幾何学様式アッティカの杯、草食む鹿と鳥の図柄
アテネ、テラコッタ、紀元前730年頃

高さ 6 cm
直径 16.3 cm
79.AE.117



竖琴弾きと連れの小像
ギリシア、青銅、紀元前7世紀

高さ 11.5 cm
90.AB.6





アルカイック時代とクラシック時代

紀元前650年から同480年にかけて、ギリシアでは人口が増加し生活も豊かになり、アルカイック美術が展開した。依然として数々のポリスと呼ばれた独立した都市国家で構成されていたことには変わらないが、対外とりわけペルシアに対し団結するなど、一つの国家としての意識が芽生えつつあった。繁栄に追風を受けたように、交易も地中海地方全域に広がり、カルタゴ、エジプト、ペルシア、エトルリアなどとの貿易も盛んになった。

アルカイック美術は宗教との関係が深く、数々の神殿や神々の彫像、礼拝者像などが、神への儀礼のため、崇拝、祈願、感謝を込めて作られた。それらはアマゾンやケンタウルス、オリンピアの神々、トロイ戦争に縁のある人物など、神話の神や歴史上の英雄に由来したものが多かった。芸術家達は定式化した表現の人物、グリフィンやケンタウルスなど空想の生き物、植物の模様を、神殿や陶壺の装飾や彫刻に施した。アルカイック美術は、正面または真横向きで直立不動の像、左右対称で反復が多い幾何学的な抽象表現に特徴付けられる。

建築様式はエジプトの影響を強く受けたもので、彫刻のある柱頭と柱礎を持つ列柱を構えた壮大な石造の建物が構築された。7世紀の中頃からは、従来の石や木やレンガ造りのほとんど彫刻装飾のない簡素な神殿に代わって、柱と梁による構築法が採用された。アルカイック様式の神殿は、神像を納めたセラ（ナオス）という神室の四方を装飾を施した列柱が囲む構造で、入り口は通常東に位置し、全般的に宗教儀式は神殿正面の祭壇において執り行われた。神室の周柱はエンタブラチュア（柱上部の装飾）と切妻式屋根を支え、三角破風とその下の水平フリーズには彫刻が施された。ドリス式とイオニア式の二つの柱式（オーダー）が確立され、神殿のみならず、ストアと呼ばれた多目的集会場、柱廊、宝庫などの建物にもこの柱式が取り入れられた。

この時期、大理石やその他の石材で実物大の人像が多く刻まれた。「クーロス」と呼ばれる少年像が一般的だが女性立像も作られ、ギリシア語で若い娘を指す「コレー」として知られる。クーロス、コレーともに正面を向き、右足と踏み出した左足が均等に体重を支え、腕は硬直して脇に添っているか、パテラという献酒を入れた浅い器を捧げ持っている。身体の各部を表わすのに、初期のものには線や幾何学的な形状が体表に刻まれているが、後の例ではより自然に形作られている。毛髪、顔、衣服等は描き入れられ

たものと考察されている。女性立像は常に着衣だが、男性立像は一般的に裸体で、肉体の美は精神の美というギリシア人の信条を強調している。クーロス、コレーとも7世紀半ばから交流のあったエジプト彫刻の影響を受け、直立不動で形式を重んじるなどの類似点が見られる。墓標や記念碑、礼拝像とされた実物大の彫刻像のほかに、青銅やテラコッタ製の彫刻も作られた。

アルカイック美術の陶器には形、様式、表面装飾のいずれの点でも、幾何学様式と延長線上の発展が見られる。スフィンクス、ライオン、ロータス、パルメットなど、東方からの装飾モチーフが取り入れられたのも前時代同様だ。ヒドリア（水差し）、キリックス（杯）、アリバロス（香水びん）、アンフォラ（貯蔵瓶）、クラテル（ワインと水を混ぜる器）などが盛んに作られた。

紀元前7世紀にコリント人陶画家達が、淡い粘土の地色に黒の図柄を浮き立たせ、細部を彫り込むという高度な技術を確認した。この技術により複数の人間描写や豊かな線表現が可能になり、より叙述的な図柄が描かれた。アッティカの陶画家達もこの方法を習得してさらに黒像式という様式に極め、やがてアルカイック時代の末にはアッティカ陶器が輸出市場を独占した。幾何学様式時代に広く好まれた幾何学模様や花文も引き続き陶画に採用されたが、壺の肩や首や土台部分など目立たない部分に配され、像画が中心を広く占めた。

概してアテネの陶画家達は、より鮮明なイメージを出すために個々の人像の主要な細部をすべて描き出すことに執心し、そのためには横顔に正面向きの目を入れるなど、実際に一視点から見える像と矛盾してもいとまなかった。また、黒像式には、輪郭が読み取れるよう像を平面化しなければならないことのほか、短縮法が使えず遠近を出すには部分的に像を重ねる表現に頼らざるを得ないなどの限界があった。

それにひきかえ紀元前530年頃にアテネで導入された赤像式は、より自由な表現をもたらした。この陶画技術は従来の逆で、背景を黒に彩色し赤褐色の地色をそのまま図柄として浮き立たせる手法だ。細部は彫り込むのではなく黒く筆で加えられ、その黒を淡くして柔らかさを出すなど多様な細部表現が可能になった。

黒像式と赤像式の二つの陶画技術は紀元前480年頃まで並行して存在したが、やがて

制限の多い黒像式はパンアテナイア祭のアンフォラ用に限られるようになった。この特製アンフォラは、アテネの神聖なオリーブ林から採集されたオリーブ油で満たされ、パンアテナイア競技の勝者に与えられたもので、片面にアテナ女神、裏にスポーツ競技という図案は、紀元前6世紀に確立されて以来、同2世紀に生産が取りやめになるまで変わることはなかった。

紀元前6世紀半ば頃から陶芸家や陶画家達の自覚と社会的地位の向上が顕著になり、署名入りの陶器も見られるようになった。アッティカ陶器は特に神話主題に富み、古代ギリシアを解明する上で重要視される。このように高度に洗練されたアッティカ陶器のほか、東部のロードス、ペロポネソス半島のラコニア、エウボエア島のケルキスなどギリシア各地、そして、東ギリシア人が住んだエトルリアの都市カエレなど、その土地特有の様式を持った陶器も作られた。

ペルシア戦争など外的要因も災いして、5世紀初めにアルカイック時代は終末を迎えた。ギリシアとペルシアの対立は紀元前480/479年にかけ熾烈を極め、アテネはペルシアに陥落した。その戦禍でアルカイック美術の大半が破壊されたが、戦勝者が当時の儀礼で破損した彫刻のほとんどを埋蔵したのが幸いして、19世紀に発掘されるまで保存されるかたちになった。紀元前478年、アテネを盟主とする対ペルシアのデロス同盟が結成され、各同盟都市は献金と引替に、重装歩兵、戦艦、武器など防衛を供与された。しかししだいにアテネがこれら都市国家の保護を建前に、ボイオティア、メガラ、エウボエアなどギリシア本島の各地で主導権を握り、紀元前454年にはデロスから資金庫を移してさらに勢力を増強し、芸術のみならず政治でも国際的な中心地として栄えた。

デロス同盟による財力の安定と対ペルシア勝利に増した自信が、この時期ギリシアに美術や建築における大規模な発展をもたらした。これが「黄金時代」と呼ばれるクラシック時代（紀元前480～323年頃）で、芸術、科学の分野も繁栄に沸き、劇作家アイスキュロス、ユーリピデスやアリストファネス、哲学者ソフォクレスやプラトン、弁論家デモステネスらが傑出した。

クラシック時代を代表する建築物に、神聖アテネのアクロポリスがある。ペルシア戦争でもとの建物が破壊された後、紀元前5世紀後半にアテネの政治家ペリクレスの指揮

下再建された、パルテノン、エレクトイオン、プロピュライア、そしてアテナ・ニケの神殿からなり、いずれも豪華な装飾彫刻が施されていた。彫刻家でもある建築家フェイディアスの構想になるパルテノン神殿は、アテネの守護神アテナ女神に捧げられたもので、優雅な建物や装飾意匠は、自己抑制などギリシア人が美德とした道徳観念を反映したものだだった。

クラシック時代に新たに加わった建築意匠はコリント柱式で、バッサイのアポロ神殿内部に純粹に装飾目的で用いられたのが最初で、アカンサス葉飾で飾り立てられた柱頭を持ったものだ。コリント式はその後、ドリス式やイオニア式に並ぶ独特な建築意匠として確立した。

彫刻では、理想化した肉体を自然で総体的な人像として表現することを習得した後、動きを持たせてそれが衣服や身体に現れる様を写實的に表わす試みがなされるようになった。クラシック時代の代表的芸術家としてはポリュクレイトスがあり、人像を立体空間にある一個の均整の取れた存在として表わす法則を定義したことで知られる。ポリュクレイトスの均整のカノン（法則）は、身体各部分の比例を示したもので、槍を担いだ若者の彫像「ドリフォロス（槍を担ぐ人）」という作品に、その結晶が見られる。後期にはリュシッポスが均整のカノンをさらに追及し、実際の頭身の比例数値にこだわることなく、目で見て美しい人像を表現した。その結果生まれたのは、より細身で背が高く、身体の割には頭が小さめの人像だった。同じ頃、プラクシテレスがギリシア美術初の裸体女性像「クニドスのアフロディテ」を制作し、一方スコパスは豊かな感情を表現した彫刻像を創造し、感情を抑制し理想化した人間像のみを対象とした従来の芸術論に挑戦した。スコパスは窪んだ目や深くしわのよった額などを表わすことにより、様々な人間の生きざまを捕えようとした。そういった人間への関心は、次のヘレニズム美術に大きく影響を与えることになった。

クラシック時代も盛んに陶器が作られ、紀元前5世紀末にかけて、彫刻と同様陶画にもあらゆる人間模様が描かれるようになった。紀元前460年頃、アッティカでは白地式という新しい陶画が人気を集め、専らレキュトスという葬祭用の油もしくはワイン入れに採用された。白地式は全体に白い液体粘土を塗った陶面に彩色する技法で、さらに自

由な表現を可能にし、陶画と壁画とが密接な関連性を持っていたことを立証している。

紀元前431年、ギリシアは再び長期に亘る戦争状態に入った。以前のペルシア戦争とは異なり、このペロポネソス戦争はギリシアの各都市国家が互いに相手を陥れようとしたもので、そのうちでもアテネ対スパルタの戦いが熾烈を極めた。それに追い討ちをかけるように紀元前430～427年に疫病が流行し、紀元前404年、北ギリシアのマケドニアに敗北したアテネの衰退をもって、ペロポネソス戦争が終結した。アテネを襲った戦争と疫病という二重の災難は、数多くの墓標、より人間味を与えられた神像彫刻、そして風俗主題の増加が物語っている。

その後紀元前4世紀半ばに、ギリシアはマケドニアのフィリッポス2世を支配者とする新たな勢力体制に置かれた。紀元前336年にフィリッポスが亡くなると、その後を継いだのが息子のアレキサンドロス大王だ。ギリシア本土を継承したアレキサンドロスは、東はインド、北は南ロシアそして南はエジプトまで征服し、マケドニア帝国をギリシア史上最大規模に拡張し、その征力を抑圧できたのはカルタゴとローマのみであった。しかし紀元前323年アレキサンドロスの没後、帝国は部下の将軍達によってマケドニア、ペルガモン、アンティオキア、アレキサンドリアを中心とする小国に分割された。

四段の動物模様のオルペ

コリント、テラコッタ、紀元前650～625年

高さ32.8 cm

本体直径17 cm

ヴァティカン73の画家作（推定）

85.AE.89



段状の動物模様のオイノコエ
ロードス、テラコッタ、紀元前625年頃

高さ 35.7 cm
本体直径 26.5 cm
81.AE.83



ヘレネの略奪とデИАネイラの略奪を描いた盾の破片
アルゴス、青銅、紀元前6世紀初期

高さ 16.2 cm

幅 8 cm

アルゴスのアリストダモスの署名入り

84.AC.11



有翼の猫を形どった家具支え
スペイン（タルテッソス）、
青銅に金メッキ
紀元前 7世紀～6世紀初期

高さ 61cm

79.AC.140



段状の動物模様と頭像付き丸型ピクシス
コリント、テラコッタ、紀元前570年頃

高さ21.8 cm

本体直径22.2 cm

キマイラの画家作（推定）

88.AE.105



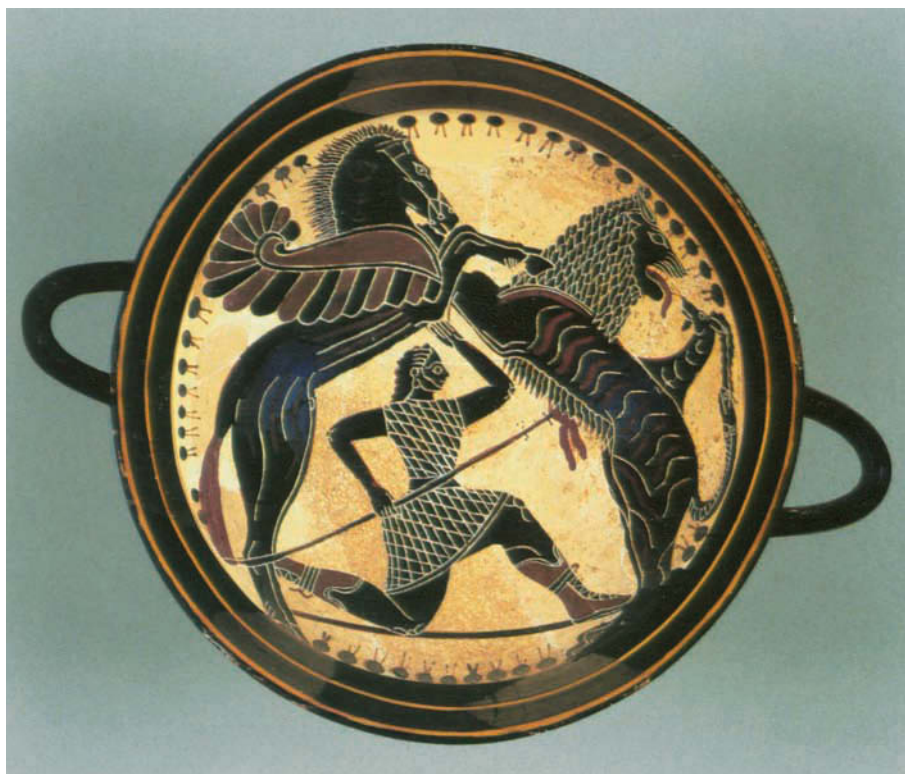
アリバロス
 アテナを背後にヒュドラと戦う
 ヘラクレス、ヒュドラの後ろに
 イオラオス
 コリント、テラコッタ、
 紀元前6世紀初頭

高さ 11.2 cm
 幅 11.7 cm
 92.AE.4



ラコニア風黒像式キリックス
 内側：ベレロファンとペガサスの
 キマイラ退治
 スパルタ、テラコッタ、
 紀元前570～565年頃

高さ 12cm
 杯の直径 14cm
 ボレアドの画家作（推定）
 85.AE.121





コレー像の破片
ギリシア、パロス島大理石、
紀元前530年頃

高さ73cm

幅41cm

93.AA.24

アッティカ黒像式A型ゾーン杯

内側：ゴルゴネイオンを囲んで横たわる六人の宴会客

外側：ヘラクレスとディオニュソス（A面）；ヘラクレスとトリトン（B面）

アテネ、テラコッタ、紀元前520年頃

縁の高さ13.6 cm

杯の直径36.4 cm

リュシピデス風の陶画

アンドキデスの陶芸（推定）

87.AE.22



アッティカ赤像式キリックス

内側：恋人達

外側：運動する男性像（A面）；運動する青年像（B面）

アテネ、テラコッタ、紀元前 515～510年頃

高さ 11 cm

直径 33.5 cm

カーペンターの画家作（推定）

85.AE.25



アッティカ白地式レキュトス、
女性と青年の世話で武装する二人の兵士の図柄
アテネ、テラコッタ、紀元前500年頃

高さ33.5 cm

肩の直径12.6 cm

ドウリス作の陶画（推定）

84.AE.770



アッティカ赤像式C型キリックス

内側：イリアス(トロイの陥落)

外側：アキレウスに連行されるブリセイス (A面)；

ヘクトルとアイアスの果たし合いに、アポロとアテナ (B面)

アテネ、セラコッタ、紀元前 500～490年頃

高さ 19 cm

直径 46.6 cm

オネシモスの陶画 (推定)；陶芸家ユーフロニオスの署名入り

83.AE.362







アッティカ赤像式B型杯

内側：アイアスの身体を被うテクメッサ

外側：アキレウスの武器を巡って口論するオデュッセウスとアイアス（A面）；

アキレウスの武器の受与者を選ぶ投票風景（B面）

アテネ、テラコッタ、紀元前 490 年～480 年頃

高さ 11.2 cm

直径 31.4 cm

画家プリュゴス作（推定）

86.AE.286



アッティカ赤像式キリックス
 内側：ガニュメデスにかしずかれるゼウス
 外側：ケファロスを追うエオス（A面）；ガニュメデスを追うゼウス（B面）
 アテネ、テラコッタ、紀元前480年頃

高さ13.3 cm
 直径32.4 cm
 画家ドウリスの署名入り；ピュトンの陶芸（推定）
 84.AE.569

アッティカ赤像式マスク柄カンタロス
アテネ、テラコッタ、紀元前480年頃

取っ手を含めた高さ21.1 cm

本体直径17.4 cm

ファウンドリーの画家の陶画とユーフロニオスの陶芸（推定）

85.AE.263



サテュロスの小像
ギリシア、青銅、紀元前 480～460年

高さ 10 cm
幅 4.3 cm
88.AB.72





重装歩兵ポリスの墓標
メガラ、大理石、紀元前480年頃

高さ149.8 cm

幅44.5 cm

90.AA.129

倒れた青年の小像
ギリシア、青銅に銅象眼、紀元前 480～460 年

幅 7.3 cm
長さ 13.5 cm
86.AB.530



赤像式カリックス・クラテル
ゲー（ガイア）とその息子タイタン族のオケアノスとディオニュソス（A面）；
テミス、パロス、エパフォス（B面）
アテネ、テラコッタ、紀元前 470 年～460 年

高さ 43 cm 直径 54 cm
画家シュリスコスの署名入り
92.AE.6





赤像式レキュトス、ヘレネの姉妹に伴われたヘレ
ネとパリスの図
アテネ、テラコッタ、紀元前 420～400 年頃

高さ 18.5 cm
画家メイディアスの一門（推定）
91.AE.10



アッティカ赤像式足付きディノス
トリプトレモス王の出立を見送る
神、女神、英雄達
アテネ、テラコッタ、紀元前 470 年頃

高さ 36.8 cm
本体直径 35.7 cm
画家シュレウス作（推定）
89.AE.73



アッティカ、フィロゼノスとフィロミーネの墓標
アテネ、ペンデリコン大理石、紀元前400年頃

高さ 102.5 cm

幅 43.25 cm

83.AA.378





彫り柄のあるアタニアスの墓標
ボイオティア、黒石灰石
紀元前5世紀末～前4世紀初頭

高さ 168 cm
最大幅 80 cm
93.AA.47

アタニアスの墓標刻図
ビヴァリー・レーザー＝パール
によるスケッチ





アッティカ赤像式渦巻装飾のある大クラテル、
長椅子に横たわるアドニスに
食物を供するエロス、
寝台の足元に座ったアフロディテ（A面）；
宴会で長椅子に横たわる三組の男女（B面）
アテネ、テラコッタ、紀元前390～380年頃

高さ70.6 cm
本体直径40.6 cm
画家メレアグロス作（推定）
87.AE.93

パンアテナイア賞杯蓋付きアンフォラ
アテナ・プロマコス（A面）；
勝者に栄冠を授けるニケ、
右に審判、左に敗者（B面）
アテネ、テラコッタ、紀元前363/362年

蓋込みの高さ89.5 cm

肩部の外周115 cm

陶画は「婚礼行列の画家」作（推定）、
陶芸家ニコデモスの署名入り

93.AE.55





パンアテナイア賞杯蓋付きアンフォラ、
アテナ・プロマコス（A面）；
御者付き二輪戦車とアポパテス（B面）
アテネ、テラコッタ、紀元前340/339年

蓋込みの高さ99.5 cm
マルシュアースの画家作
79.AE.147



カルピス、エロスを抱えたヘラクレスの図
ギリシア、青銅、紀元前4世紀中葉

高さ 48 cm
本体直径 31.5 cm
79.AC.119

若い勝者の像
ギリシア、青銅
紀元前4世紀後期

高さ151.5 cm
リュシッポスの弟子の作（推定）
77.AB.30



アッティカ赤像式ケルチ風ペリケ、パリスの審判（A面）；
ひとりのギリシア人と戦う二人のアマゾン達（B面）
アテネ、テラコッタ、紀元前330～320年頃

高さ48.3 cm
本体直径27.2 cm
マルシュアースの画家の一門の作（推定）
83.AE.10





ヘレニズム時代

ヘレニズム時代は紀元前323年のアレキサンドロス大王の死から、ギリシアがアクティウム沖の海戦で敗北を期しローマに支配力を譲り渡した、紀元前31年までを指す。アレキサンドロス大王のマケドニア帝国拡張に伴って、ギリシア人は様々な新しい文化に触れ、ギリシア美術に新たな展開がもたらされた。彫刻の分野ではモデルの対象が広がり、老若、貧富あらゆる階層のあらゆる心身を持つ人々が主題に取り上げられた。スタイルも理想主義から極端な自然主義まで広域に多様化した。また、風景や静物など新たな主題も加わった。ヘレニズム初期の美術は概して激情的な表現を特徴とするが、後期にはあらゆる分野に亘って古典主義復興の傾向が見られる。ヘレニズム時代には帝国の分割に伴って個人主義が台頭した。これを反映して人気が高まった肖像画も、より豊かな個性描写を特徴とする。

アレキサンドロス大王の没後ギリシアを分割統治した將軍達は、いずれも美術と文学の強力な支援者だった。それを雄弁に物語るものとして、プトレマイオス朝エジプトのアレキサンドリアに建立された偉大な図書館や、小アジアのベルガモンに造営されたアクロポリスのアッタリドの手になる「ゼウスの祭壇」など、一連の壮大な建築や彫刻群が挙げられる。ギリシア文化が征服地に影響を与えたように、ギリシアも外国の神々や信仰、そして新しい科学知識や技術を取り入れた。このような折衷主義は、この時期の演劇にも顕著に現れている。アリストファネスらクラシック時代の古典喜劇詩人が、アテネのポリス住民のみが理解できた当世事情を取り上げたのに対し、メナンドロスを始めとするヘレニズムの新喜劇作家達は、日常生活の織りなす人間模様など普遍的な主題を扱った。このように、ヘレニズム時代の文化は、折衷多様化を特徴としている。

この時代、故郷をはなれペルシアなどヘレニズム諸王国をまたにかけて事業を展開し、多大な財力を蓄える者が出てきた。私財の増大とその誇示趣味を反映して、宝石や貴金属を使った装飾美術品の生産が盛んになった。真珠などそれまで知られていなかった宝石、インドから入ったエメラルドやガーネットなどに人気が集まり、宝飾品からも交易関係の新たな展開がうかがわれる。聖職者の礼拝服や宗教的な奉納品に限らず、個人の私有物としての宝飾品の需要も増えた。これは東方やエジプトの文化の影響で、かつてなく個人の裕福さや快樂が追求されるようになったことの現れである。

建築の分野では、アルカイック時代やクラシック時代から引き継がれたあらゆる様式の建物が構築されたが、ドリス式に代わってコリント式が目立つようになった。ヘレニズム時代はまた、居住者個人の住み心地や住居との関係に関心が高まり、驚異的な変革がなされた時代でもあった。人を驚かせるような意外性を持たせるなど、住人参加でドラマチックな住空間を創造した建物も登場した。建築家達は地元の美しい風景を利用して、面白い眺めや珍しい眺めを取り込んだ建物を考案した。数学的な設計法を使い、なかには方眼図をもとにした規則的な空間構成を得意とする建築家もいた。

彫刻では、依然として宗教目的の彫刻が作られた一方、宮廷や個人の住居を飾るものも目立って増え、ペルシア帝国を始めギリシア全域にまたがった繁栄ぶりを物語っている。スコパスの感情表現やリュシッポスの個性表現などクラシック時代の彫刻をふまえ、宗教用、個人用共に劇的で超写実主義的な傾向になっている。ヘレニズム時代の彫刻家達も、立体性、複雑なポーズ、像とその周辺環境の関係などへの関心を、たゆまなく追及した。彫刻も建築同様、観賞者との個人的かかわりを深める試みがなされた。感動的な表現にしろ古典的な表現にしろ、ヘレニズム時代の芸術家達が、クラシック時代の先駆者ポリクレイトスやフィディアスの業績に負うところが大きいことは明らかだ。

アレキサンダー大王の頭像
ペンデリコン大理石（推定）、
紀元前310年頃

高さ 28 cm
73.AA.27







葬儀用花冠
ギリシア、金に青、緑のガラス象眼
紀元前4世紀後期

直径 30 cm

93.AM.30



プトレマイオス朝宝飾品コレクションから
アレキサンドリア(推定)、金に諸貴石の
象眼と付着細工
紀元前220～100年頃

メダリオン部分にアフロディテとエロスの彫り
物がある頭髪用ネット
高さ 21.5 cm
幅 8 cm
92.AM.8.1

アンテロープの端飾りのある耳輪
最大幅 21 mm
92.AM.8.4

どくろを巻いた上腕用プレスレット一对
直径 7.8 cm
92.AM.8.6

中央にヘラクレス結びがある王冠
直径 17.5 cm
92.AM.8.2





雄牛の頭を形どった杯、着脱可能な
ライニング付き

東ギリシア、銀と金箔メッキ
紀元前2世紀

高さ 12.1 cm

ボウルの直径 9.5 cm

87.AM.58

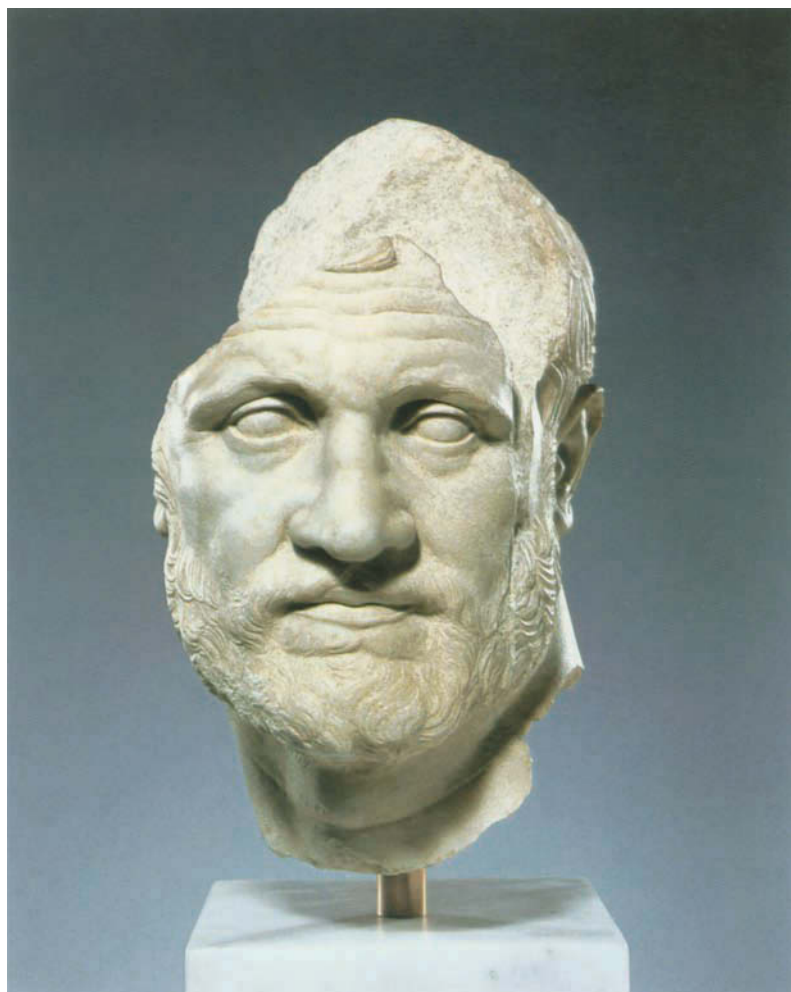
アラバストロン（小瓶）
東ギリシア帝国（推定セレウコス朝
もしくはプトレマイオス朝）
ファイアンス陶器、紀元前2世紀

高さ 23 cm
88.A1.135



ヘルメス柱像
青銅に象牙象眼、紀元前100～50年

高さ 103.5 cm
台幅 23.5 cm
ポエソスの工房
79.AB.138



支配者の頭像
ギリシア、大理石、紀元前2世紀中葉

高さ 40.7 cm
幅 25 cm
91.AA.14



男鹿を形どったリュトン（角型杯）
東セレウコス朝、銀メッキにガラス象眼の目
西暦1世紀

高さ 26.5 cm
縁の直径 12.7 cm
86.AM.753

ボウル
東セレウコス朝
銀メッキとガーネット
紀元前1世紀

直径 20 cm
86.AM.752.3







エトルリアと古代ローマ前の南イタリア

紀元前1世紀にローマによって統一されるまで、ラティウム、エトルリア、アブリア、カンパニア、シチリアなどのイタリア各地は、それぞれ異なる民族が支配していた。そのうちでもエトルリア人は、ローマによる統一以前のイタリアで最も勢力を持っていた民族で、ティベレ川とアルノ川の間のティレニア海沿岸から内陸に向かって領地を広げていた。紀元前8世紀末から、鉱物資源輸出を始めギリシアや他の国々との交易により、急速な経済発展を遂げた。それに伴い芸術も盛んになり、新たに財を築いたエトルリア人を客目当てにしたギリシア人芸術家が流入したこともあって、ギリシア美術の影響を色濃くしたものだ。エトルリアはその後領地拡張を続けたが、紀元前5世紀にギリシアとカルタゴが海運の支配を握ってからというもの、政治、経済ともに衰退の一途をたどった。しかしエトルリアは勢力が衰えた後も、最盛期のアルカイック時代同様、クラシック時代やヘレニズム時代のギリシア文明を吸収していった。

エトルリアの神殿様式は、ウィトルウィス（注：古代ローマの建築家）が「トスカナ式」と記したように、ギリシア建築との類似性を多少持ちながらも独自性を保ったものになっている。トスカナ式神殿は3つの神室（1つの神室と開放状の側室からなるものもある）を持ち、入り口は一か所、表構えに4本の列柱を配した構造になっている。軒が突き出た幅広の建物で、全体が高い基壇の上に建てられた。内部は壁画で、外部の屋根頭、両端、破風の端、ペディメント（三角形切妻壁）などは彫刻で装飾された。

現存するエトルリア美術はほとんどが葬儀関連で、埋蔵品であった故に形を留めたものだ。茶毘に付した遺骨を納めるために、故人の肖像で飾られた骨壺や石棺などが作られ、墓室は宴会、狩猟、葬儀風景そのものなどを主題にした、色とりどりのフレスコ画や石のレリーフ彫刻で被われた。高度な工芸技術を駆使した精密なデザインの耳飾りなど、貴金属製装身具も副葬品として見つかっている。

主題、種類、技術すべてにおいて多様性が見られるエトルリア美術は、進んだ社会が存在していた証であるとともに、エトルリア人はギリシア人の普遍的理想主義と違って、もっと身近な日常生活に関心を寄せていたことを示している。ギリシア美術の影響を強く受けたエトルリア美術だが、その影響はイタリア半島の各地に波及していった。

ギリシアがマグナ・グラエキアと呼ばれる植民地を確立した紀元前8世紀以降、南イ

タリアやシチリア島に、ギリシアの文字、都市社会、美術様式や意匠が伝播した。ギリシアと南イタリアの交流は青銅器時代（紀元前3000～1100年）までさかのぼり、特に絶頂期のミュケナイの交易はめざましかった。アルカイック時代（紀元前650～580年）初めには、ギリシアからマグナ・グラエキアに、物品の輸入のみならず芸術家も流入した。地元の芸術家達もコリントやエーゲ海諸島からの輸入品を盛んに模倣し、ギリシア神話や英雄を主題に取り入れることから始まり、さらに黒像式や赤像式陶器、大型彫刻神像や礼拝像、建築や建築装飾彫刻、宝飾品に至るまで、ギリシアの様式や技術を倣した造形活動が行われた。南イタリアの植民地はギリシアほど良質な大理石などの素材に恵まれていなかったため、地元の芸術家が使える材料は限られていた。彫刻家達はテラコッタを使ったり、石像の彩色部分には石灰岩など安くて手に入りやすい材料で代用し、顔や手など素材が見える重要な部分にだけ大理石を利用するなどした。

紀元前6世紀はギリシア本土で人口が増加し経済が成長したのに連れて、南イタリアのギリシア植民地でも、交易の増大と本土との関係強化により大きく発展を遂げた。なかでも、シュバリスやパエストウム（注：ポセイドニアともいう）は、壮大で洗練度の高い都市として知られた。やがて紀元前5世紀末には、ギリシア植民地で独立の動きが高まった。シチリア島支配をめぐるカルタゴとシラクサ間の戦争や、ティレニア海沿岸植民地の没落、アテネの西方進出失敗などの果て、南イタリアの人々はギリシア信仰を捨てイタリア半島内に関心を集中するようになった。特にタレントウムやカンパニアの台頭がめざましく、イタリア半島の文化と芸術の中心として、北部のエトルリアやローマに影響を与えるようになった。

カエレ風ヒドリア、ヘラクレスと
イオラオスによるレルネの
ヒュドラ退治の図柄
エトルリア、テラコッタ、
紀元前525年頃

高さ44.6 cm、本体直径33.4 cm
イーグルの画家作とされる
83.AE.346





小さな頭像と
ロゼットのついた耳飾り一対
エトルリア、金、紀元前6世紀後期

直径 4.8 cm
83.AM.2.1



神話レリーフ彫刻片
南イタリア、銀メッキ、紀元前500年頃

高さ 8.4 cm
長さ 28.7 cm
83.AM.343





踊るマイナスとシレノスを
形取ったアンテフィクス
(軒先の飾り)
エトルリア (南エトルリア)、
テラコッタ、
紀元前5世紀初頭

高さ 54.6 cm
96.AD.33

ニケの小像に支えられた
ティミアテリオン
南イタリア
(タレントウムもしくはシチリア)
テラコッタ、紀元前500～480年頃
高さ 44.6 cm
86.AD.681



セイレンを形取ったアスカス
南イタリア、青銅、紀元前5世紀前半

高さ 15.3 cm

長さ 18.7 cm

92.AC.5



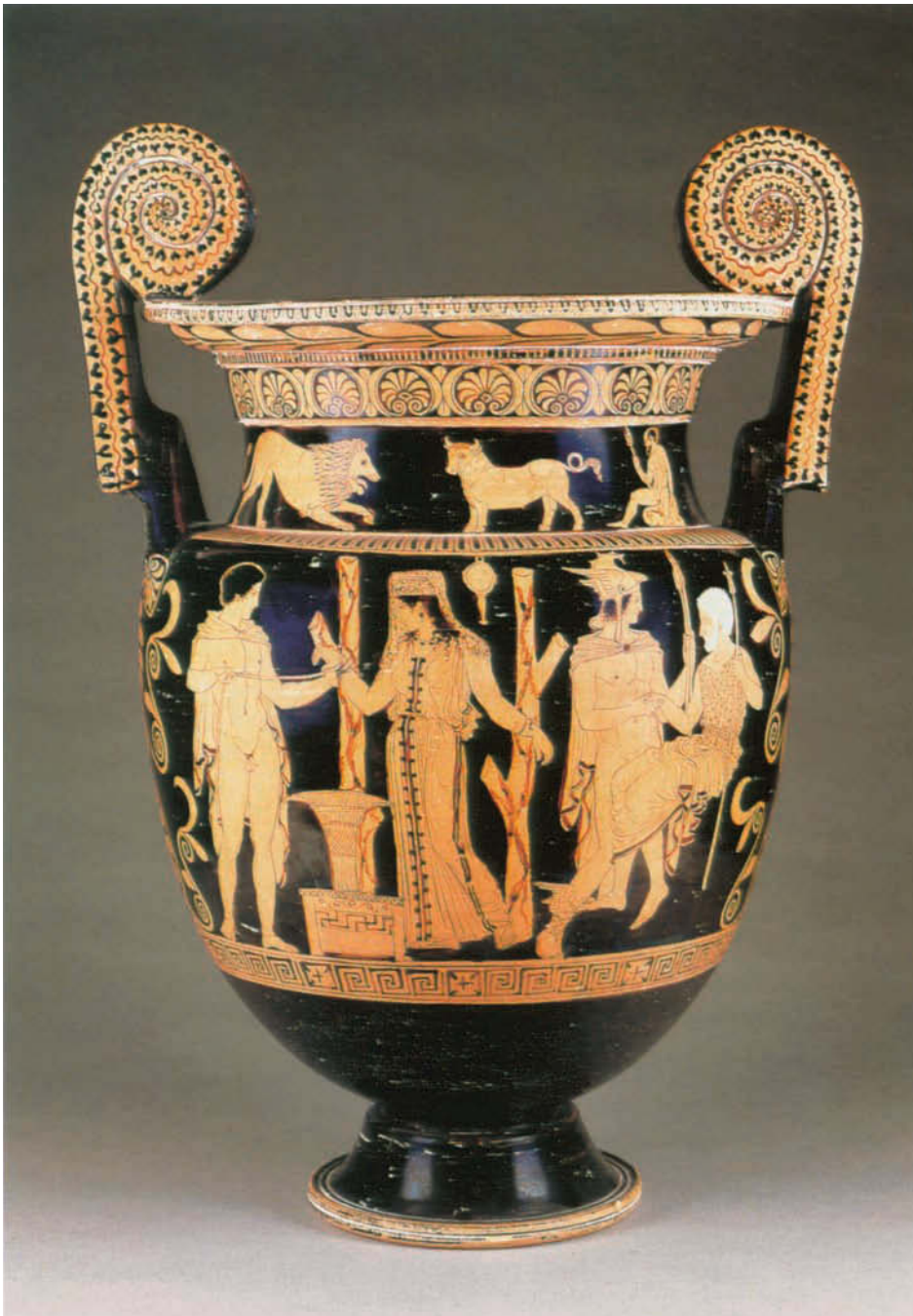
ゼウスの小像
エトルリア（ピオムビーノ）、青銅、
紀元前480年頃

高さ 17.2 cm
55.AB.12



女神の偶像、おそらくアフロディテ
南イタリア、石灰石とパロス島大理石に
多彩色、紀元前425～400年頃

高さ 220 cm
88.AA.76



赤像式渦巻き装飾付クラテル
アンドロメダそしてペルセウスと
ケフェウスの条約（A面）；
二人の青年とそれを取り巻く
二人の女性（B面）
南イタリア（アプリア）
テラコッタ
紀元前430～420年頃

高さ 63 cm
口径 37.5 cm
シシュフスの画家もしくは
その一門の作（推定）
85.AE.102



レリーフ装飾付祭壇一對
三人の女性像が、対にあるアドニスとその連れの像を見ている図
南イタリア（タレントゥム）、テラコッタ、紀元前4世紀初頭

高さ 41.8 cm
上板の幅 31.5 cm
86.AD.598





首付きアンフォラ

テベスの城壁に梯子を架けて登るカパネウス（A面）；
三人のサテュロスと二人のマイナスがいる風景（B面）
南イタリア（カンパニア）、テラコッタ、紀元前375年頃

高さ 63.4 cm

カイヴァノの画家作（推定）

92.AE.86



グリフィンのプロトメが付いた
カルキディキ型ヘルメット
南イタリア、青銅、紀元前350～300年頃

高さ(頬当てを除く) 28 cm

幅 16.3 cm

93.AC.27

赤像式カリュックス・クラテル
エウロペの略奪（A面）；デイオニュソスにサテュロスとマイナス（B面）
南イタリア（パエストウム）、テラコッタ、紀元前340年頃

高さ 71.2 cm

直径 59.6 cm

画家アステアスの署名

81.AE.78



詩人（推定オルフェウス）の座像とセイレン像
南イタリア（タレントウム）、テラコッタ、紀元前310
年頃

高さ（詩人） 104 cm
高さ（セイレン） 140 cm
76.AD.11







テーブルの脚部（推定）、倒れた雌鹿を襲う
二体のグリフィンの像
南イタリア、小アジア大理石に多彩色
紀元前4世紀後期

高さ 95 cm
台の長さ 148 cm
85.AA.106





レカニス（足洗桶）、アキレウスに武器を運ぶテティスとネレイス達
南イタリア、大理石に多彩色、紀元前4世紀末

高さ 30.8 cm、
幅 60 cm
85.AA.107



赤像式ルーツフォロス、ゼウスと
アフロディテの下にレダと白鳥（A面）；
墓碑に座った女性とそれを取り巻く参列者（B面）
南イタリア（アプリア）、テラコッタ
紀元前4世紀後期

高さ 90.1 cm

口径 26 cm

「ルーヴル MNB1148の画家」の作（推定）

86.AE.680



犬に餌をやる青年像の透かし彫
貴石入り指輪
イタリア、金とカーネリアン
紀元前3～2世紀

貴石 18.1 x 13.2 mm

85.AN.165



共和政ローマ時代と帝政ローマ時代

紀元前753年と伝わるロムルスによるローマ建国の伝説は、鉄器時代の社会集団の統一に端を発したものらしい。当時ローマは、ラティウムとして知られる古代イタリアの一地方の都市に過ぎなかった。ローマ発祥には、エトルリアや南イタリアをはじめ、紀元前8世紀中頃に栄えた古代イタリアの周辺地方の影響もあったに違いない。しかし、記録が残っていない上、後世新たな都市が幾重にも重ねて建設され遺跡にも乏しく、発祥期のローマについてはほとんど知られていない。考古学的検証では、パラティーノの丘に古代ローマ最古の集落が認められており、ここから周辺の六つの丘に広がったとされる。それぞれの丘を隔てる谷は埋葬地にされていたらしいが、エトルリアの王の支配下にあった紀元前7世紀後半、パラティーノとカピトリノという名の二つの丘の谷間が干拓され、神殿や公事の集会所からなるフォーラムとよばれる公共広場が建設された。このようにエトルリアがローマに及ぼした影響は大きく、紀元前6世紀の終盤に七人目で最後のエトルリア人支配者となったタルクイニウス・スペルブス王が追放された後も、エトルリアの影響は続いた。

共和政下のローマは、規模、勢力共に増大し、紀元前3世紀初頭にはイタリア半島最強の都市国家となり、同2世紀末には地中海沿岸で最大になった。エトルリアからの独立の祝賀としてカピトリノの丘に建立された、ユピテル、ユノ、ミネルヴァに捧げた神殿は、今も一部形を留めている。このカピトリノ神殿は彫刻や神像で飾られていたが、これらがエトルリア人彫刻家の手になるものであることは、「ウルカがユピテル像を彫った」と伝える大プリニウスの文献からも確かだ。ヴァロ（注：古代ローマの学者）は、ローマ人は建国から170年の間、一体も神像彫刻を制作しなかったと記述している。偶像制作はギリシアの習慣で、それがエトルリア文明に取り入れられローマに伝えられたのだ。このようにして、ローマ人は美術、宗教、文学、哲学などすべての面でギリシア文明を崇拝するようになった。ローマ人がギリシアから略奪しローマへ持ち帰った美術品の数々がそれを物語っている。

ウルカによるユピテル像を始め、共和政時代初期に作られた大型彫刻のほとんどがテラコッタ製で、中部イタリアは彫刻に向いた石材に恵まれていなかったことがわかる。ラティウムの初期の彫刻家は青銅彫刻も得意とし、カピトリニ博物館蔵の「狼の乳を

飲むロムルスとレムス」はその一例である。共和政時代には青銅製の肖像も公私共に数多く作られ、ギリシアの例に習って屋敷や広場に置かれた。しかしギリシア人が裸体像を好んだのとは対照的に、ローマではエトルリア同様専ら着衣像が作られた。

ローマ時代の肖像画は、葬送行列で掲げ歩かれた「イマギネーズ」と呼ばれる故人の肖像画に起源を持つ。この習慣は大ブリニウスや紀元前2世紀のギリシア人歴史家ポリュビオスの文献にも記されている。とはいえ肖像画を描いたのはローマ人が最初ではなく、その写実的な人物描写も彼等独自のものではない。古くはエジプト美術の重要な分野であったのが、紀元前4世紀になってギリシアに伝わったもので、ヘレニズム時代には肖像彫刻を残すのがごく一般的になった。エトルリア人も写実的な頭像で骨つばを飾ったが、これらと同様ローマ共和政時代の肖像も、現実主義を反映して、理想化を廃し写実性を誇張した表現になっている。老人をモデルにした肖像が多いことから、人生経験を積んだ老人の知恵を重んじ、敬老の念を強調したものと察せられる。

建築家もエトルリア様式の影響を受け、エトルリアに取り入れられたギリシアの建築様式が波及した。ローマの都市国家は、神殿とフォーラムを取り巻く周辺建物の位置関係を始め、規則的な設計のもとに建設された。コサやオステティアなど紀元前4～3世紀に築かれた都市は、ギリシアのミレトスやツリイに習い、碁盤の目状の区画構成に基づいていた。デクマヌスとカルドと呼ばれた東西と南北に交差する街路を主軸に（ローマ式カストルム要塞を思わせる構造）、フォーラム、神殿、公共建物を中心とした都市設計になっていた。住宅も左右対称、規則性が好まれた。西暦79年にヴェスヴィオス火山の噴火で灰に埋もれたポンペイやヘルクラネウムで発掘された、古いものでは紀元前4世紀建造の家屋跡が、アトリウムを中心にした当時の典型的な間取りを今日に伝えている。この時代に多く建立された神殿の造りも、ギリシアとエトルリアの影響が色濃く、エトルリア様式同様全体が基壇に建ち、入り口は一か所のみで、正面にはギリシア風の切り妻彫刻が施されていた。

このようにローマ建築の構造はギリシアとエトルリア様式に準じたものだったが、資材と技術に斬新さが見られる。その良い例がアーチ構造で、紀元前4世紀にギリシアが開発したものの実用に至らずにいたのを、ローマ人はその経済性と構造上の利点を完全

にものにし、橋や水路橋、さらに大型公共建物や住宅の基盤や骨組みなどに活用した。建材の開発もめざましく、紀元前3世紀には、砕いた石灰岩を粗石に混ぜて作る強固なコンクリートが発明され、これによって広い空間を持った大規模な建物が可能になった。ローマ建築を代表するバシリカ -- 列柱と回廊からなる市場や法廷の入った大型公共建物 -- と浴場は、共和政時代に建てられた。

紀元前200年以降の共和政時代後期、ローマはヘレニズム諸王国に進出するなど勢力を伸ばしたが、内外の紛争につまずき、紀元前133～31年の終末期には市民戦争に陥った。また、これに追い討ちをかけるように紀元前90～88年には、イタリアの同盟都市国家間で「同盟都市戦争」が勃発した。そして紀元前31年、カエサル（後のアウグストゥス帝）が、アントニウスとクレオパトラをアクティウムで破って、共和政時代は幕を閉じ帝政時代に入った。帝政を確立したユリウス・クラウディウス期は西暦68年まで続き、アウグストゥス時代にはパックス・ロマナ（ローマの平和）を実現し、二百年間にわたって領土を広げ隆盛に沸いた。この安泰期も永遠には続かなかったが、306年にコンスタンティヌスが権力を握るまで、代々の皇帝のもとにローマ帝国は拡張を続けた。

紀元前27年の帝政時代の幕開けは、オクタヴィアヌスがアウグストゥスと改名し、元老院からプリンケプス（第一人者）の称号を与えられたことから始まった。アウグストゥスは着位した当時、まだ市民戦争の記憶を生々しく留めている民衆に、ローマの安全を保証する皇帝としての信望を植えつけようと、黄金期のギリシアを規範にした。この時代の古典主義美術はその現れで、特に皇帝や皇室の肖像は理想的に表現され、誰の肖像かは判るものの、伝記者スエトニウスらの記述に残る肉体的欠点などはないものとされた。帝政時代の皇帝像は主に四種類あり、トーガ（注：白いウールの外衣）を装ったトーガトウス、胴鎧を着けたロリカトウス、裸体及び半裸体、騎馬像がそれにあたる。ユリウス・クラウディウス期末にかけては、アウグストゥス時代の古典主義に比べ写実的な傾向にあったが、依然として柔和な印象を漂わせた肖像が作られた。

立像以外にもレリーフ彫刻が盛んで、神殿や祭壇、バシリカ、アーチ、戦勝記念碑を飾った。共和政時代に着工した建築計画はアウグストゥスの指揮下に引き継がれ、伝記者スエトニウスは、「（アウグストゥスは）レンガ造りのローマを大理石の都市と化した」

と書き記している。現在のカラーラにあたる古代ルナの大理石採石場は以前から知られていたが、アウグストゥス時代ほど重用されたことはなかった。神殿や公共建物に加え大規模な邸宅（ドムス）も構築され、ティベリウス帝はドムス・ティベリアナを、その数十年後にはネロ帝がローマ初の宮殿ドムス・トランジトリアを建てさせた。これは64年にローマを襲った大火事で焼失し、ドムス・アウレアに建て替えられた。

帝政ローマにも壁画装飾の伝統は受け継がれた。紀元前200年から西暦100年頃の内装壁画様式は、四種類に大別される。第一様式はメーソンリー調とも呼ばれ、大判の色板を組み合わせ大理石の壁のように見せたもの、第二様式は建築調とも呼ばれ、壁面全体に柱など建物の写實的描写と風景や都市景を組み込み、まるで壁を打ち抜いたように見せたものだ。第三様式は装飾調又は装飾燭台調として知られ、これも建具などを描き込んだ様式だが、きらびやかな燭台のように見える柱などそれ自体が装飾的に描かれ、それを縁取りにして風景画や人物画なども壁に直接描かれた。第四様式は上記三様式の組み合わせで、複雑な折衷様式や空想的な様式を指す。

ユリウス・クラウディウス期最後の皇帝ネロが去った後のローマは、内外の紛争で荒廃し、68年から翌年にかけては内戦状態に陥った。その後96年までフラヴィウス家が政権を握り、父ヴェスパシアヌス帝からティトゥス帝とドミティアヌス帝兄弟へと引き継がれた治政により、再び安泰を取り戻した。ヴェスパシアヌス帝時代（69～79年）の彫刻は共和政時代を想起させ、過去の名帝のイメージをもって自分を印象づけようとする皇帝の意図があった。深彫りによる劇的な明暗対比が特徴のパロック風な表現で、女性像、殊に皇帝達の妻の肖像は、当時の皇帝によって打ち立てられた様式を反映している。この他にローマ・エジプト様式のミイラ肖像画があるが、これも外観の重視という世俗性の表われである。ミイラ肖像画は、紀元前30年クレオパトラの死をもってプトレマイオス朝が没落して以来ローマの支配下にあった、旧ヘレニズム王国のオアシス都市ファイヤムから伝来した。フラヴィウス家は、公共施設の建築にも力を入れ、ヴェスパシアヌスのフォーラム、コロッセウム、ティトゥスの浴場、ドムス・フラヴィアウスなどが建てられた。

96年にドミティアヌス帝が没した後、ローマ帝国は五賢帝時代に入り、ネルヴァ、ト

ラヤヌス、ハドリアヌス、アントニヌス＝ピウス、マルクス＝アウレリウス帝と、84年にわたって治政が受け継がれた。平和が続き人口は増加を極め、地理的にもブリテン島から北アフリカと中東にまたがる広域を占め頂点に達した。しかしマルクス＝アウレリウス帝とその子コモドウスの支配時危機に陥り、五賢帝時代は幕を閉じた。この時代の美術は古典主義回帰が特徴で、元老院によってドミティアヌスの後任に選ばれたネルヴァの彫像などは、フラヴィウス朝のバロック風表現と対照的だ。偉大な軍人皇帝だったトラヤヌスも好んで古典主義的な肖像を作らせたが、アウグストゥスの再来を思わせることを狙ったものだ。続くハドリアヌス帝（在位117～138年）は、ギリシア崇拜者であり、芸術を奨励したことで知られる。同皇帝はよく領土を巡回して軍隊の忠誠を確かめたり、辺境の防塁を固めるためトラヤヌス帝が拡張した領土の一部を手放したりしたため、概して貴族の支持が低かった。ハドリアヌス帝のギリシア好みは、髭をたくわえたギリシア人哲学者風の彫像からも窺われ、この種の肖像は次のコンスタンティヌス帝時代にかけて人気を集めた。

2～3世紀には各地で石棺が数多く作られた。アッティカやアジア式などの東型は、四側面すべてが彫刻で被われ、切り妻屋根風の蓋、もしくは人像が横たわった長椅子風の蓋を持つ。西型は壁に添って置かれる設定で三側面のみ装飾され、蓋は平らで手前の辺に直角に添った縁が付いている。両型とも神話主題のレリーフ彫刻で飾られたものが多い。

193年にセプティミウス・セウェルスが擁立し、235年まで続いたセウェルス朝では、カラカラ帝、セウェルス・アレキサンダー帝らが出たが、政情の安定と不安が交互した混乱の時代だった。こうした世情を反映して、そのころ創始されたキリスト教など、人々に救いと死後の安楽を約束する神秘的な宗教に関心が高まった。密教の神殿が次々建てられ、入信儀式などを表わした宗教画や、ミトラやディオニュソスなどの神像が造られるなど、美術にもその影響が現れている。セウェルス朝に続いたのは波乱と無政府状態の軍人皇帝時代で、235年から284年の間に20人の皇帝が次々と入れ代わる無秩序な時代となった。この時代の憂いを含んだ表情の肖像が、当時の不安を物語っている。唯一「波乱の時代様式」から逸脱しているのはガリエヌスの肖像で、新プラトン主義の

ギリシア崇拜者として、心労や苦悩の内にも冷静さがうかがわれる面持ちに表現されている。

293年にディオクレティアヌスが四分統治という新しい体制を確立し、自分を東の正帝、そしてマクシミアンを西の正帝とし、それぞれに副帝を配した分割支配で、内情不安の平定にあたった。この専制政治により個人の自由が奪われ、重税が課せられ、厳しい価格統制が敷かれたが、その見返りとして政情と経済の安定を取り戻した。「四分統治の皇帝像」は、自然さを失い極めて形式化された特異な様式で、目だけが大きく強調され硬直した表情の角張った彫像になっている。

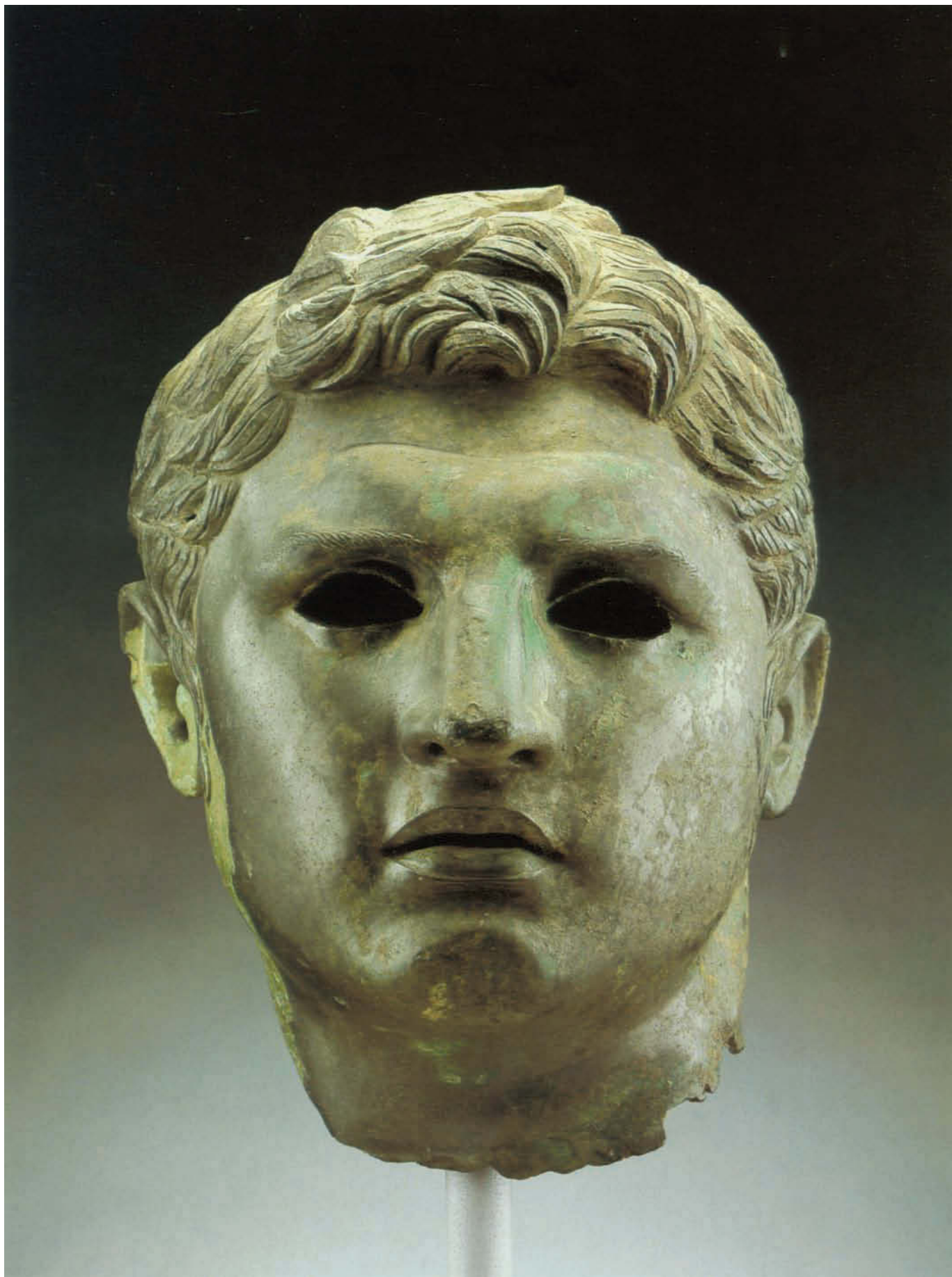
四分統治で幾らか平和を取り戻したのもほんの束の間で、ディオクレティアヌスとマクシミアンの退位を期して、305年から324年にかけて再び内戦状態に陥った。長い混戦の末、324年にローマ帝国最後の皇帝コンスタンティヌス大帝が専制君主となり、権力の移行を象徴してコンスタンティノブルに遷都した。コンスタンティヌスは313年にキリスト教を国教と定めたが、上向きに見据えた大きな目が特徴的な彼の肖像にキリスト教支持の姿勢が現れているという考察もある。

帝政ローマ時代、人口、領土、公私の富がいずれも最大規模に達したが、変動と不安の絶えない時代でもあった。比較的平和で繁栄時に君臨した皇帝もいれば、内紛、領地拡張やヨーロッパの他民族の台頭と移動が引き起こした戦争などに煩わされた皇帝もいた。しかしながら文学や美術はその間留まることなく隆盛を続けた。古代ギリシア美術の影響は、この時代を通じてローマ芸術のすべての分野に普及した。芸術愛好家は皇帝や皇室のみならず、繁栄に富を築いた庶民にも広がり、住宅装飾や礼拝用の美術品が盛んに求められた。

コンスタンティヌス大帝が去った後、ローマは再び東西に分割された。西は度重なる異民族の侵入に悩まされ、東にはビザンティン帝国が台頭しつつあった。「古代様式」時代後期は、政治的、宗教的、社会的変動がめまぐるしく、芸術においても従来の様式と主題を伝承しながらも、しだいに独自のモチーフや表現法へと変化していった。こうしてローマ帝国は滅びたものの、その美術は現在に至るまで多大な影響を与え続けている。

スラ（推定）の肖像
小アジア、青銅
紀元前1世紀

高さ 29.5 cm
73.AB.8





若い女性のミニチュア胸像
ローマ、青銅にガラスの目
紀元前1世紀後期

高さ 16.5 cm
台の直径 6.7 cm
84.AB.59



デモステネスの肖像を刻んだ貴石入りの指輪
ローマ、カーネリアンと金、紀元前1世紀

貴石 19 x 15 mm
アベレスの署名(貴石彫刻)
90.AN.13

デモステネスの胸像
ローマ、青銅、紀元前1世紀

高さ 7.9 cm
幅 3.4 cm
92.AB.105





フラスコ、祭壇に近づく花輪をした少年、その上にヒヒに
化したトツ神、祭壇前にもう一人の少年、オベリスク(石碑)を
背にしたファラオの彫刻
ローマ、ガラスのカメオ細工（青地に白）、紀元前25～後25年

高さ 7.6 cm

85.AF.84



メドゥーサの首を持つペルセウス
カメオ細工入りの指輪
サードニックス（赤縞瑪瑙、茶地に白）と金
紀元前25～後25年

最大直径 20.6 mm

87.AN.24



スキュフォス、女性座像の前に若いサテュロスとシュリンクス（A面）；
二人の女性像の間にリラ（豎琴）を持った若いサテュロス（B面）
ローマ、ガラスのカメオ細工（青地に白）、紀元前25～西暦25年

高さ 10.5 cm

幅 17.6 cm

84.AF.85



ランズダウンのヘラクレス
紀元前4世紀のギリシア製の模作、
ローマ、ペンデリコン大理石
西暦125年頃

高さ 193.5 cm
原作はスコパス作（推定）
70.AA.109



メナンドルの胸像
イタリア、青銅、1世紀初期

高さ 17 cm
72.AB.108



カリグラの頭部、トーガトウス（注：トーガを着けた肖像）差し込み用
ターソス島（推定）大理石、1世紀初期

高さ 43 cm

72.AA.155

祭壇に座った喜劇役者を形どったティミアテリオン
ローマ、青銅に銀象眼、1世紀前半

高さ 23.3 cm
足付き台の幅 13.3 cm
87.AC.143



胸像一対
ローマ・ガウル (推定)、青銅
西暦67～70年

高さ 40.6 cm

高さ 40 cm

89.AB.67.1-2





ケレスもしくはユノの小像
ローマ、青銅、1世紀

高さ 32 cm
84.AB.670





ローマもしくはウィルトゥスの小像
ローマ、青銅、1世紀

高さ 33.1 cm
84.AB.671



ナイル川風景を描いたフレスコ壁画の断片
イタリア、石膏壁にテンペラ、西暦70年頃

高さ 45.7 cm

幅 38 cm

72.AG.86



二長老のトーガトウス

ローマ、青銅、西暦40～68年

高さ 26 cm

幅 13.8 cm

85.AB.109

アポロ像
ローマ、大理石、2世紀

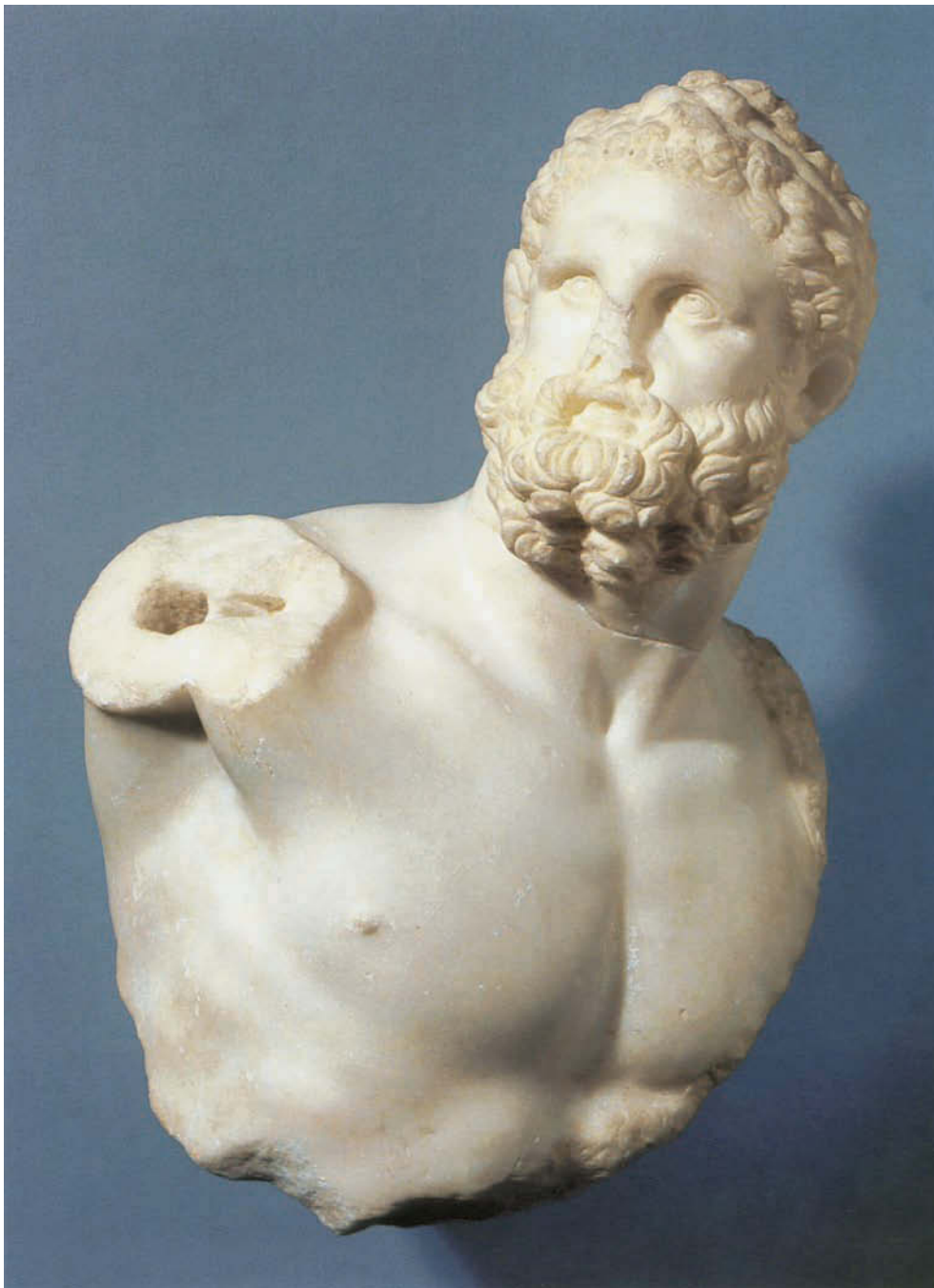
高さ 145 cm
85.AA.108



女性のミイラ肖像
エジプト（ファイヤム）、麻に包んだ木版に蠟画と金箔
西暦100～125年

高さ 33.6 cm
幅 17.2 cm
インドラの画家作（推定）
81.AP.42





ローマ貴婦人の胸像
ローマ、カラーラ大理石、
西暦150～160年

高さ 67.5 cm
83.AA.44

拳闘士（ヘラクレスか？）の胸像
エジプト（アレキサンドリア）、パロス島大理石、
2世紀

高さ 58 cm
幅 39.5 cm
83.AA.11





石棺、(前面) ヘクトルの死体を引きずるアキレウス；
(側面) 武装するアキレウス；(裏面) ケンタウロスの戦い；
(側面) スキュロス島で見破られたアキレウス
大理石、2世紀後期～3世紀初頭

本体の長さ 249 cm
本体の高さ 134 cm
蓋の長さ 218 cm
蓋の高さ 100 cm
95.AA.80





ミューズ神像(学問・芸術を司る女神)
メルポメネもしくはポリュヒュムニア
トルコ（クレムナ）、大理石
西暦200年頃

高さ 97 cm
94.AA.22



蛇の足をした巨人の小像
小アジア(推定)、青銅
2世紀後期～3世紀初頭

高さ 14 cm
幅 12.5 cm
92.AB.11



禿げた男の頭部肖像
小アジア、プロコネス大理石、西暦240年頃

高さ 25.5 cm
85.AA.112



ローマの宝庫からの金装飾品の一部
4世紀後期～5世紀初頭

ガーネット、緑、青ガラス象眼の円形ペンダント付きネックレス
ペンダントの直径 6.3 x 5.4 cm
83.AM.225.1

カメオ細工にガーネットの象眼縁飾りのペンダント付きネックレス
ペンダントの直径 4.2 x 3.8 cm
83.AM.225.2

ペンダント付き鎖2本
長さ 23cm と 24.5cm
83.AM.226.1-2

緑ガラス、エメラルド、ガーネットの象眼と、
セイロンサファイアのカボション
飾り付きコイン細工のベルト
飾りの最大直径 7.5 cm
83.AM.224、86.AM.531

漁師のレリーフ彫刻片
ビザンティン、銀と鍍金
6世紀

直径 60 cm
83.AM.347







哲学論に高じるブトレマイオスとヘルメス・トリスメギストスのレリーフ彫刻片
ビザンティン、銀、6世紀

45 x 28 cm
83.AM.342

J. ポール・ゲティー美術館の傑作は、世界に誇る当美術館所蔵の名品を全七巻のシリーズで紹介したものだ。古代美術、装飾美術、デッサン、彩飾写本、絵画、写真、彫刻部門のそれぞれから厳選した作品を、豪華なカラー図版に歴史や美術史にちなんだ解説を添えて紹介したこの比類ない集大成には、過去五千年の美術の感動の全容が収まっている。

J. ポール・ゲティー美術館の傑作：
シリーズの他のタイトル

J. ポール・ゲティー美術館の傑作：
装飾美術

J. ポール・ゲティー美術館の傑作：
デッサン

J. ポール・ゲティー美術館の傑作：
彩飾写本

J. ポール・ゲティー美術館の傑作：
絵画

J. ポール・ゲティー美術館の傑作：
写真

J. ポール・ゲティー美術館の傑作：
彫刻

表紙図版

アッティカ赤像式脚付きティノス

トリフトレモス王の出立を見送る神、女神、英雄達

アテネ、テラコッタ、紀元前470年頃

89.AE.73 (47ページ参照)

紀元前3千年の大理石の偶像から14世紀～15世紀頃の貴石をちらばめた宝飾品まで、J. ポール・ゲティー美術館の古代美術コレクションは、古代地中海地方の彫刻家、陶芸家、画家、金工師ら工芸家の、卓越した技術と芸術性を証明している。勝利に誇る青年を表わしたギリシャ時代の珍しい等身大の青銅像や、ランズダウンのヘラクレスとして知られるゲティーが愛した大理石像などに代表される優れた作品の数々を紹介した本書は、コレクションの個々の作品の質の高さと種類の豊富さを物語っている。この他には、ギリシャやエトルリアのテラコッタ製陶器、青銅像や大理石像を始め、クラシック時代後期やブトレマイオス朝時代の細やかな金細工なども代表的な作品である。

J. ポール・ゲティー美術館
ロサンゼルス

Printed in Singapore

